

玄侑宗久著<莊子>

莊子をパラパラ、またまた面白い文章発見。ハネツルベの話、便利な機械の話。

天地扁（ハネツルベのいつわ）

子貢（しこう）、南のかた楚に遊び、晋に帰らんとして漢陰を過ぎ、一丈人（長老の敬称）の方将（まさ）に圃畦（ほけい）を為（つく）るを見る。隧（すい）を鑿（うが）ちて井に入り、甕を抱きて出でて灌（そそ）ぐ。桴桴然として用力の甚だ多きも、而（しか）も功を見ること寡（すく）なし。子貢曰わく、此（ここ）に械あり、一日に百畦を浸す。用力甚だ寡（すく）なくして、而も功を見ること多し。夫子、欲せざるかと。圃を為（つく）る者、仰ぎてこれを視て曰く、奈何（いかん）と。曰わく、木を鑿（うが）ちて機を為（つく）り、後は重くして前は軽く、水を挈（あ）ぐるごとく流るるがごとく、速きことは洗湯（いっとう）の如し。その名を樗（こう：ハネツルベ）と為（な）すと。

圃を為る者、忿然として色を作（な）すも、而も笑いて曰わく、吾これを吾が師より聞けり。機械ある者は必ず機事あり。機事ある者は必ず機心あり。機心、胸中に存すれば、則ち純白備わらず。純白備わらざれば、則ち神生定まらず。神生定まらざる者は、道の載せざる所なりと。吾は知らざるに非ざるも、羞じて為さざるなりと。子貢、瞠然として慙（は）じ、俯（ふ）して對（こた）えず。

◎孔子の弟子の子貢が、楚に旅した帰り、畑仕事をする老人を見る。穴を掘って井戸まで降り、水を甕に入れ、穴から出てきて畑に水を注いでいる。子貢は、「ハネツルベ」を紹介した。老人はむっとして、笑い、師匠から教わったことだが、「機械を用いるものは 機事がある 機心があれば 本性が定まらない ハネツルベは知っているが 恥ずかしから使わない」

◎玄侑先生：効率を求めることを、「恥ずかしい」とする感覚、これはぜひ大事にしたいところです。効率化を目指す、するとそこには、少しでもうまくやろうという機心が生じる。機心が生じると、精神ももちまえも安定しなくなる。

◎ハネツルベの話、機械と、機事と、機心と、純白をどう解釈するか・・・先生方いずれも当たり前の回答を示されている。「人は機械のみに頼ってはいけない・・・」人間の生き方として、歩きかたとして、寝かたとして、さてどうしよう。今の時代に、コンピューターの時代に、いかにも教訓めいているが、2300年前の大昔に、このように考え、教訓なのか、子貢の話なのか、田んぼの話なのか、老人の師の話なのか・・・。

◎この話を聞いて、オレはオレ自身の山登りを考えた。老齢になって体力が衰えたといえ、ヤマは面白い、もっと登りたいと思っている昨今、「どこが面白い」と聞かれ、振り返ってみる。今も河瀬さんから懐かしい写真が送られてきた。日付を見ると、1992年8月31日、澤山・河瀬・オレの3人、オレが45歳の時のものだ。電車で穂高まで、白馬大雪溪を登り、祖母谷まで降りて、富山から夜行バスで帰った、と思い出す。オレは山に入って、今でこそ重い荷は持てないのでいやだけれど、かつては、20K以上の重い荷を担いで、山の斜面を歩いた、いつも地面を見ていることが多い、地面を見ながら何を考えるでもなく、何を想うでもなく、ただ足を動かしている。過酷であることとか、それが修行であるとか、自身に何かを課したいとか、そんなくだらないことは思ったことがない。それこそ莊子先生じゃあるまいし、そんな能書きをいう自分を想像するだけでも、恥ずかしい。「楽しいじゃないの 面白いじゃないの このしんどさがいいのだよ 疲れ切って なんでもいいから美味しいものを食べて 美味しい酒を飲んで・・・」である。とはいえ、このデジタル時代、この文もデジタルで成しえる、成しえた文を、なんだか知らないどこかの箱に持ち上げる、誰かが読んでくれる。オレのくだらない文とはいえ、何人かの人が読んでいて、これはうれしいネエ。

玄侑宗久著<莊子>

莊子をパラパラ、またまた面白い文章発見。哀駘它（あいたいだ：哀ちゃんと呼ぶぞ）という、おっさんの話。

徳充符扁：魯の哀公、孔子に問いて曰わく、衛に悪（みにく）き人あり。哀駘它（あいたいだ）という。丈夫（男でも）のこれと処（おる：一緒に住む）者は思いて去るを能わず（離れられなくなる）。婦人（女などは彼を見ただけで）のこれを見て、父母に請いて、人の妻に為らんよりはむしろ夫子の妾と為らんという者、十数にして未だ止まず。（誰かの妻になるよりはあの人の妻になりたい と両親にねだる始末）未だ嘗て其の唱うるを聞く者あらず、常に人に和するのみ。人に君たるの位の以って人の死をすくうなく、聚祿の以って人の腹をみたすなし。また悪きをもって天下をおどろかし、和して唱えず、知は四域より出でず。しかも雌雄を前にあつまるは、是かならず人に異なる者あらん。（自分の考えなど主張することもなく、ただ相手の話に同調するだけ。人の死を救ってあげられる権力があるわけじゃなし、人の飢えを満たす財力があるわけでもない。ほんとに見た目も醜くて、知識だって国内のことに限られるらしい。こんなありさまなのに、多くの男女がその前に集まってくるのは、これはきっと常人と違ったところが彼にはあるのだろう。

◎玄侑先生：この物語で注目されるのは、「和して唱えず」という哀駘它的あり方でしょう。莊子は自己主張することは、人為的でさかしらな事だと考えているようです。こっちがこういえば、「うんそうだね」といい、あっちがああいっても、「うんそうだね」とうなずく。「お前の意見は どっちなんだ」と言いたくもなるが、莊子に言わせれば、人の考えや言葉というものは、じつに頼りなく当てにならないものだから、突き詰めていけば、どっちだっていいわけである。

「聖人は愚鈍なり。万歳に参じて、一に純をなす。万物ことごとく然りとして、是をもって相包む。」

聖人は愚鈍で一切を忘れる。悠久の変化に身を任せ、しかもただ一筋に道を守り通す。万物あるがままでよしとし、暖かい是認のところでこれを包むのである。男女共々に哀駘它在が人気なのは、彼が温かく包み込む力を持っているからでしょう。

◎哀（アイちゃん）というおっさんは素晴らしいね、こんな男に憧れる、こんな人になりたい、オレはこれからもこの考え、この生き方、これでいこう、と思うほどに素晴らしい。哀（アイちゃん）が、醜いというのもいい事だ。玄侑先生、いい事をおっしゃるが、莊子はほんとにこういうことを言いたかったのかな、これではいかにも教訓的過ぎる。哀駘它という不細工な男が、「そうじゃのう」といつもにこにこしていることを言いたかったのではないのかね。不細工な男、初老のおっさん、扉を開けて土間を掃除する。さしずめこれは竹ぼうきか、電気掃除機か、糊の付いたコロコロか、床を覗みながら往ったり来たり、土間も床もきれいになっていく。一昔前なら、オレも、煙草に火を点けるのだが、今は禁煙時代、だからといって飴をしゃぶるわけにもいかず、口を動かすこともなく洪茶をすすり、インスタントコーヒーを飲み、椅子に腰かける。扉の外は人が歩く、車がそっと通る、埃が舞う、木の葉が舞う、おしゃべりババ様の言葉が舞う。「いい天気じゃのう」「そうじゃのう」「なにしてる」「そうじゃのう」「朝飯は食ったか」「そうじゃのう」時が流れる。

◎絵を描いている。「このキャンバス あれを描こう」「こっちのキャンバス これを描こう」絵の具を入れる。今の夏の時期、絵の具はすぐに乾く。「次の色はこれだな」「次の筆はあれで あんな風に刷いて、あんな風に盛り上げて」「まだまだ足りない 力がない 想いが重い 絵の具が軽い」「いやや すこし 入れこみすぎた 想いが重い もっと軽くしないと」「いやあ また 良くなった」「あちゃ～ これはだめだ 失敗だ これはいけない」「おもしろいね これが アート生活か これが芸術か」「いやあ 違うよ オレの絵かき生活は 絵の具遊び 塗るだけ 描くだけ 色をつけるだけ かたちを造るだけ」「ただの だけだよ」

極暑というにふさわしい夏が終わろうとしている。今年は、体温を超える 37 度 C の日が一週間以上続いたのではないかな、オレのアトリエ、38 度 C の日もあった。近隣の町で 40 度 C のところもいくつかあった。「のど元過ぎれば熱さ忘れる」の言葉通りそれから半月、ひと月の時間が過ぎ、なにかのおり、肌寒いと感じてシャツをもう一枚羽織る季節になってくると、「そうか 37 度 C か そういえば 暑かったな」と人ごとのような話にもなる。いつも季節の変わり目、変わりだした当初の何日間は、身体がその変化についていけず、「あついなあ」「さむいなあ」「こんなことで この季節 のりきれない」など弱気になるが、身体自身が徐々に慣れ、「ちと あついなあ」「ちと さむいなあ」と平気表現に変わっていく。

暑いさなか、日中 35 度 C を超えると身体がだるく、アトリエで大きなタオルを床に敷き寝転がる、ずっと眠りについて目覚めると汗が出ているが身体は気持ちがいい。そんなゴロリ、だるい日を過ごしていた、体力も減り、水ばかり飲むので体重も 1.2 キロ増加した。ただ絵かき生活にとっていい事は、絵の具の乾きが早い、普段なら半日一日待っていなければいけないのだけれど、一時間二時間もすれば乾いている、次の色が入られる。

体積の大きなアトリエ、家庭用クーラーではなかなか冷えない、何かいい対策はと、7500 円で大型扇風機を買ってみた。大型扇風機、これはいい、家庭用とは比べ物にならないような強い風が来る、ただ部屋の生暖かい風をかき混ぜるだけじゃないか、と言われるかもしれないが、でも極暑の中、強風は身体にやさしいと悦に入っている。あちこちの工事現場で同じものが回っている。いろんな工事職人のおっさん方、分厚い長袖のシャツを全身汗で濡らし、しゃがみこんで仕事をしている。あちこちの工事現場というのは 6 月の地震でずれた瓦、割れたり落ちたりした壁、もうこれは使い物にならないと思われる家屋の解体、こんな工事があちこちであった。「瓦の工事は 100 万円を超えるよ うちの値切って 20 万円ですんだ 家が壊れた もう住めないので引っ越しする」という話も聞く。オレンチも耐震工事のおかげで、震度 6 の地震、風速 40M の強風にも耐えていた。先日来気になるのが屋根のこと、オレンチ屋根は今風のカラーベストで葺いてあるが、経年 40 年弱、その角々の金物が錆びてきている、これは早々にペンキを塗らなくてはと思うが、オレ自身あの高さに登る元気はない。壁の塗装も値が高そうである。

マスコミじゃあるまいし、オレが災害のことをとやかく言っても、と思うのだけれど、「ちょっと続くね ただごとじゃないね」とかすかに不安がよぎる、いや、かすかではないかな。始まりは、阪神淡路大震災（1995 年）、もう 23 年になるのか、早朝でまだ寝ていた、一階の小さい布団部屋のような所で寝ていた、異様な揺れに目覚めた。震度が 5 だったのか 6 だったのか忘れてたが、経験したことのない揺れにびっくりした。娘二人もまだ中学生か高校生、びっくりして起きてきたが、あくびをしながらまた寝いった。少し時間が経って、TV のニュースを見て驚いた。神戸の町が大変なことになっている、高速道路が倒れ、あちこちから炎が上がっている。近隣の町だが、神戸も京都も詳しくはないけれど、それでも近隣ということで、神戸の町は過去に何度も訪れている、そんな知った街が無残に崩れている様には驚いた。これの少し前、アメリカのロスで高速道路が倒れていた地震画像を見た時、「日本の高速道路では考えられない事故」とニュースの解説氏がのたまわっていたのを覚えている、「あれはうそか」と驚くと同時に、こんなことがあっていいのか、と呆然とした。

天候異変が、災害が、続き過ぎだ、ちょっとおかしい、といぶかっている。日本には四季があり、春夏秋冬いろいろ楽しめる、季節を愛でてきた。50 年前ぐらいの間隔で地震が、洪水が、噴火が、という話はあったが、こんな事柄が次々と続けて起こるのはいやだね。地球温暖化の話が騒がれて久しい。異常な暑さ、大雨や強風は地球温暖化と大いに関係していると思う。地震はどうだと考えたがどうも関係がなさそうな気がする。これからもこんな異常事態が続くのかと思うと、いかにオレ、のほほん人生でも、気持ちが滅入る。

一週間前に、「台風が日本を直撃」「大型台風 21号 関西方面に近づいている」雨戸を閉め、蒸し暑い中、昼寝をしていた、「なかなか来ないね もう行き過ぎたかな」などと雨戸をそっと開け、外を見ていた。「たいしたこともなく 終わりそうだ」なんて高をくくっていたが、それから5分10分したところから、異様な強さの風が吹いた。家が揺れるような風を経験したのは初めてだった。

50歳代のころ、八ヶ岳連峰の硫黄岳を横切ってシラビソ小屋へ歩いていた時、硫黄岳のてっぺんでそれこそ飛ばされそうな風を経験した。歩けば1分2分で行ける距離、20キロのザックを背負って四つん這になっても前へ進めなかった。大きなケルンがいくつもある間を、ケルンにしがみつつ、30分ぐらいかけて通過した。飛ばされれば、火口の方へ墜落死が待っている。そんな強風はそれ以降同じ硫黄岳を何度か通過したが遭わなかった。その後何かの機会に、防災センター的なところで強風体験をした。30メートルの風は、「たいしたことは無い」と思ったので、硫黄のてっぺんはもう少し強かったのではないかな。

今回の台風の風もそれに劣らず強い風が30分吹き続けた。6月19日に、大阪北部地震があったばかり、まだまだ各所でブルーシートのかぶった家、工事用足場に囲われた家がたくさんあるなかでのこの台風、「いやや なんだか続くね」と思っていた矢先、またまたニュースで、「北海道」と言っている。初め聞いた時には、関西を通過した台風が、日本海から北海道方面に北上して、台風一過の話をしているのかと思ったが、なんと震度7の地震の話だった。

オレ個人の話だが、6月19日大阪で地震が起こったときはちょうど北海道旅行の最終日、その日の夕方には今回の北海道地震の中心地と言われるあたりを港に向かって走っていた。大阪北部地震は直接体感していないので、どれだけ揺れたのか、どんなに怖かったのか、「オレ 大阪に居なかったの 後ろめたい立場ですが・・・」とお見舞いの電話やメールにはそう答えていた。ガスが一週間ほど止まっただけの被害だった。後ろめたいオレが言うのもおかしいが、阪神大震災や東日本大震災に比べれば、まだまだ規模が小さい。

阪神大震災の後、東日本大震災（2011年）の大津波を実況で見せられた、「これは悲惨 たいへんだ 5万人ぐらいの死者が出るのでは」と思った。いまだに津波がゆっくり進んでくる画像を見るとぞっとする。あの津波の画像を見ないようにしている。アメリカ人が、9・11のビル崩壊の画像を見たくないのと同じだろう。

熊本地震（2016年）が起こった。大雨と地震が続く。大雨は毎年のように日本のあちらこちらで被害をだしている。その都度洪水、崖崩れ、家屋浸水の画像が見られる。ほとんどの場合人口密度の小さい山間部のできごとなので、良くないことだけれど、人ごとのように思ってしまう。気になるのが紀伊半島豪雨（2011年）とその後、京都嵐山が浸水した大雨。ともに台風による大雨だったと思うが、紀伊半島の山々、琵琶湖と日本海の間、山に登りに行く度に、その爪痕がたくさん見られた。道も家も無くなった、何年も経っているのにいまだに復旧されていない、こんなところがいくつもある。北海道に新十津川という地名がある。1889年奈良の十津川村で大水害が起き、その避難民が故郷に住めなくなり新天地を求めて北海道に移住したそうだ。

地球温暖化の問題解決はどなたかに任せておくとして、オレは、オレのまわりの人たちは、チト、生活レベル、文化レベルを下げる努力をしてほしい。身体を動かすことをいとわずに、右へ左へ、上へ下へ、汗をかくことで。と言いながら、修身の教科書でもあるまいし、宮沢賢治でもあるまいし、と少々照れるが、ここまで言ってしまったのだから最後まで続けよう。衣食住は必要だ、不可欠だ。格好のいい兄ちゃん姉ちゃんが、恰好のいい、デザインが素晴らしい、服や小物を、建造物や構造物を造っている。「いいな 見たいな ほしいな」と思う。ここでけちると、美しい世界が廃っていく。グルメ、これも、SNSの登場、昨日の食事、今宵の食事、明日の飲み物と、きれいな写真の画像が飛び交い、粗食時は野蛮さのあらわれ、美味しいものが語れないのは罪のような気さえする。「ちょっと贅沢をひかえよ まわりの おっさん おばはん よ」と小さい声で。

◎朝8時、岡村車、阪急茨木駅付近で、相澤・前川・増谷各氏を乗せ、神峰山寺方面に向かった。以前からこの週3日間で、「西穂へ行きましょう」という予定だった。新穂高温泉で車を止め、ケーブルで上へ。一時間半の歩きで西穂の小屋に行ける。ここは何度行っても素晴らしい、景色がいい、まわりの一万尺が見渡せる、オレの好きな場所である。テントを担いで、酒をもって2泊の予定だったが、連日の雨、秋雨前線が活発と言っているが、大阪も信州も北陸も、毎日だらだら雨の日が続いた。天気予報は傘マーク、曇りマークが消えず、晴れマークが出たぞと喜んだ翌日には雨マークに変わっているという始末、晴れないかなと期待したが結局だめだった。「なら ちょっと 雨が止んだら ハイキングでも」と狙っていたら、ついに降水確率ゼロの日がきた、それも大阪と神戸だけ、滋賀や奈良方面は天気がぐずっている。近所のポンポン山か箕面方面でもと調べると箕面方面は通行不可の場所がいくつかあるという情報、しかしポンポン山が荒れているという情報にはいきつかなかった。

◎ポンポン山から時計回りにぐるり一周と考えて道端に車を止めようとする、降りてきた年配のおっさん、常連の方のようだけれど「倒木 増水 あちこち 通行止め」「ここは天狗の大杉までしか行けないよ」「見てみてズボン やぶけた」笑っておられる。本山寺までの林道は重機でかたづけがすすんでいるのか、車で走るのに支障はなかったが、葉や枝はまだまだ散乱している。風の抜けそうな斜面では杉の植林が50本100本なぎ倒されている、なかには途中からボキリ折れたやつもある。この大量の倒木を目のあたりにすると、先日の台風の風の強さが思いやられる。

◎深い山に入ると、太い木がボキリ折れているのに出くわす。「わわわ 鬼か 魔物が 折り曲げた」そう思っている。ここの木々はそんなに太くないが、草がなぎ倒れるように杉の植林がバタバタ倒れている。

◎本山寺の駐車場に車を止め、まずは境内へ。立派な建物はまずは被害が無いようだ。今日はいつもの暴走車、本山寺の坊主の迷惑走行には会わなかった。前にも書いたが、彼は人が嫌いなんだろうね。

◎平日だというのに2.3人の人が下ってきた、「大杉から向こうはいけないよ」みなさんそうおっしゃる。その大杉までやってきた、大杉も後ろの祠も被害はなさそうだが、その先がすごいことになっている。大小20本ぐらいの木が斜面をふさいでいる、向こうが全く見えない。「これは 行けるやろう」と木を跨ぎ、ザックを先にほおり投げ、幹と幹の間をくぐり抜け、穴ぼこにもぐる、なんてことを繰り返して悪戦苦闘、服もザックもどろどろながら、なんとか道に出た。

◎悪戦苦闘の個所がずっと続くわけではない、道に葉や枝は散乱しているが、風の通り道でないところは前のままに道が保たれている。鉄塔の電線も無事だ。尾根の細い道も水で流されてはいない。大杉からてっぺんまでに何度か巻道を行った。台風以後に何人かが入ったのだろう、かすかに踏み跡が残っている、獣道と間違わないようにその踏み跡をたどり、倒木を跨ぎ、斜面を横切り、ここは滑るとやばいぞ、という所もいくつかやり過ごし、「おお登山道があるよ」とたどり着き、「二足歩行で歩けるのはいいねえ」とてっぺんに向かった。

◎Mさん持参のスマホ地図を見ながら、「もうすぐ頂上ですよ」という、「いやもうちょうむこうですよ」といながら5分もすると見覚えのある景色、やっとてっぺんに着いた。携帯電話のないオレでも、山でのスマホ地図は便利だと思う、深い山の中でも、地図が表れ自分の位置が示される。アナログの地図と磁石は持っているが、「今 オレは どこ」という情報はなかなか地図ではわからない。「地図を読めなくては」といつも反省する。「地図を見ればわかりますよ 上りなのか 下りなのか 左右の風景 前後の風景が見えますよ」と建築家の山田さんはおっしゃるが、そこまでなかなか地図が読めない。

◎このメンバーならたくさんおやつが出てきそう、弁当のご飯は少なめにした。いつもの玄米に梅干、野菜炒めに玉子焼き、リンゴとブドウを用意した。向こうから饅頭が、こちらから大福もちが、コーヒーが、パンが出てくる。オムレツが、ひじきの煮物が、うまいねえ。

◎7.8人のグループがやってきた、ノコギリを持っている、ヨキを持っている。ポンポン山の常連グループの人たちが、ちょっとでも道整備とやってくれている模様、感謝である。今回の倒木の大きさ多さは手で切るノコギリではなかなかだ、ガソリンチェーンソーで木を切るのに慣れた人じゃないとなかなかだ、と思う。

昨日、京都動物園に行った。京都動物園前で待ち合わせ、我ら夫婦二人、娘と子の四人で中に入った。祝日ということで混みあっていた、子ども、親、ジジババ、三世代が右へ左へうずをまいていた。子供R君、小学校の3年生か4年生か、スケッチに目覚めたとかで、来てくれ、見てくれ、と勇んで出かけた。絵の話は別紙で、ライオンの話、ナイルという雄ライオンの話をすすめます。

板敷の床の上に大きな雄ライオンが横たわっている。猛獣は普段ゴロリ横たわっている、目をつぶって寝ている、彼も寝ているなどと思いきや近づいた。実際近づいてみると、その大きさは牛ぐらいある、大きいものだ実感、あんな奴がやってきたらもうお手上げだとこれまた実感。彼は24歳である、名はナイル、同居していたメスライオンが先年死んだらしい。24歳と聞き、ああそう、で終わってしまうが、野生の場合ライオンの寿命は7~10年、動物園飼育でも20歳超えは珍しい。説明文に、「安楽死は考えていない」「食欲がなくなり 好物の馬肉が 食えなくなり 食べやすいものを与えている」「内蔵機能が弱り 薬を与えている」「点滴をしたいが そのためには麻酔が必要 今の彼には麻酔はより危険」などと書かれている。そんなに弱っているのかと見ていたら、小便のたれっばなし、たてがみはごわごわ、腰や後ろ足のあたりはガリガリに痩せている。ながらく見ていたらゆっくり起き上がりかけたが、なかなか時間がかかる、起き上がって半分回転、またゴロリ横になった。その動作は、最近よく目にする犬の散歩、もうほとんど歩けない老犬のよぼよぼ加減、一步一步が動かない、いつ倒れてもおかしくないというような犬を散歩に連れてくる様子を見かけるが、このライオン君、まさにその状態、「いやあ ご苦労さん もう会えないが ゆっくり休んでくれ」とあいさつした。彼の1、2年前の画像がネットに載っている、動きまではわからないのでどれほど敏捷で、走り回っていたのか、飛び回っていたのかまではわからないが、たてがみもふさふさ、まだまだ精悍な雄ライオンそのモノであった。

◎三日前、関友記子さんから電話があった、「磯辺栄一さんが たいへんな事に・・・」

◎磯辺さんのことは、オレには二十歳代からの親しい仲間がおり、そこに度々話で登場するおっさんだが、ながらく会うことがなく、一年ぐらい前、木村さん宅パーティーで初めて会った。なんと飄々とした醜男で美丈夫で頑健そうなおっさんだった。みなさんの話の筋からおれはもっと、優（ヤサ）男を連想していた。山の話が出て、山に行きたい、というのでいずれ誘うと連絡方法を確認しあった。

◎関友記子さん、「8月7日 知人宅のペンキ工事中 はしごから転落 頭を打ち 救急車で搬送 以来40日間意識が戻ってない 昨日 病院へ見舞に 行った」

◎関西の山も冬になると雪山シーズンに入る。まずはそんなにハードでない山ということで、台高の三峰山に磯辺さんを同道した。スキーのベテランらしく雪慣れしているのが強み、持久体力はないが、ゆっくりなら登れた。彼も山は気に入ったらしく、「山はいい 自力で上がるのがいい」と喜んだ。以来5.6ヶ所の山を同道した。7月中旬に、坊村から武奈ヶ岳（比良）に登ったおり、槍ヶ岳に行きませんかとお誘いした。

◎「お礼が遅くなりましたが念願の比良山に連れて行っていただきありがとうございますございました。当日はキツかったけど、時間が経つにつれ気分が高揚していい思い出に。次回は是非沢登りを企画してくださいませ。さて槍ですが、装備品に不安があることと、実力の問題、それに今仕事ムツチャ忙しく、ちょっと難しいです。もっと早く連絡せなあかんの、ごめんなさい」7月末にパソコンに連絡が入っていた。

◎そんなあと、連絡がぷつりと途切れた。アメリカに行ったのか、まさか病気はないだろうぐらいに思っていた。今、自転車で、医誠会病院に行った、四人部屋の窓際ベッドで外を向いて寝ていた、寝ていたというよりは顔を窓に向けられていただけか、身体はビクリともしない、頭部がはれ上がったように大きい、横を向いているからか、頭を打ったからか、顔もビクリともしない。喉に、腕に、排せつ器に、チューブがつながれている、「いそべさん」と小声を出したが何とも返事はなかった。先日まで、「おお きたぞお」「いやあ まかして」「じゃあ またねえ」と言いあっていたヤツとは思えない姿、男が男を見舞う武骨さが恥ずかしい、「またくるよ」で帰った。

今日は朝から晴れていた。いい天気だと寝具関係、シーツ、かけ布団カバー、枕カバー、そんなものを洗濯した。昼飯を食って、河原に行こう、運動をしようと思えば空を見上げると曇ってきた。朝の天気予報では、徐々に曇ってくるが降らないということだったが、なんだか雲ゆきが怪しい。ま、降らないだろうと干した洗濯物はそのままにして、自転車で安威川土手までやってきた。なんと陽が照ってきた、地面にくっきりオレの影が映っている、9月下旬とはいえ暑い、いやだねえ、と思いつつ走りだした。夏ほどではないが、太陽が出ている下を走るのは暑い。

「シナントロピスペキネンシス」すんなりこの単語が口から出てきた、調べると、「北京原人」となっている、「ジャワ原人」と同様、50万～100万年前の原人だそうだ。「シナントロピスペキネンシス」という長たらしい単語が10歳前後に教室で教えられ、半世紀以上も経った今、ぼろり口から出てくるのも不思議だが、こんな古い話ではなく1500年前の話がしたかった。それこそ、たった1500年前の話、栄原先生に言わせると、「まだまだわからないことがいっぱい」というように、王侯貴族のことで、10歳前後に教室で教えられた事柄が、いくつも塗り替えられている。戦後10年の教育だけど、まだまだ戦前戦中の皇国史観が残っていた、研究が進んでいなかった、「そんな天皇はおらんぞ」なんて恐れ多くも口が裂けても言い出せない雰囲気だったと想像。

馬庭あきこ著<鬼の研究>

◎「日本書紀」越の国の佐渡嶋の北、ミシハセの人が留まっている。魚を捕って暮らしている。嶋の人、「人に非ず」といい、「鬼だ」といい、敢えて近づかない。ミシハセの人とは、アイヌか、ツングースか。その130年後、朝廷が舟二百艘を駆り立て攻め、多くの虜囚を連れ帰った。その異風から勇猛果敢な蛮族は、穴居族で猪を常食とし、その脂を身体に塗り、巧みに船を操り、性格は荒々しい。とはいえ、たくさんの虜囚を京に置き、帰服した鬼どもの詫びた姿を、都の人々は見たであろう。

◎「出雲風土記」阿用という地名がある。昔、ここに田圃を耕していた夫婦がいた。あるとき、一つ目の鬼がきて、田を耕す息子を食った。息子は食われながら、「あよ あよ」といった。<一説には、出雲は鉄生産の国、異能の職業に対する畏怖があったのでは。一つ目は、燃える炎を見るうちに目をやられるものが多かった。>

◎別の書物か。伊豆諸島のどこかに異様の人の船が難破して流れ着いた。乱暴狼藉を働き、食料や船を奪って、島を出て行った。

ネアンデルタール人、これも教科書で習ったが、彼らはヨーロッパにしかいなかった、アジアにはいなかった、ということで大人になってから、オレの頭の中ではネアンデルタール人の存在は疎遠だった。最近いくつかの文章を読んで驚いた。これも少し前に発表された学説で、まだ世間的にも学問的にも容認されたわけではないが、これはすごい。現代の人、ホモサピエンスとネアンデルタール人が混血し、現代人のDNAの中に2%の遺伝子があるという。

ネアンデルタール (Neanderthal) 人は、40万年前に出現し、4万年に絶滅した。洞窟で暮らし、狩猟現場で動物を解体し、四肢を持ち帰ったので、四肢の骨が多く見つかる。炉の跡があり火を積極的に使っていた。遺体を埋葬する習慣があり、花の花粉が多く見つかったので、埋葬のさい、花を手向けたのではないかとされている。男で165センチ80キロぐらいの頑丈な体格らしい。

ネアンデルタール人が絶滅したのは、2万数千年前だが原因はわかっていない。ホモサピエンスとの暴力的衝突により絶滅したという説、獲物が競合したことにより段階的に絶滅の追いやられたという説、ホモサピエンスとの混血が急速に進み吸収されてしまったという説など、諸説がある。

ネアンデルタール人の遺伝子が、現代人に受け継がれているという学説は、2010年に出されたばかり。ホモサピエンスがアフリカを出た直後、12万～5万年前に中東で混血がおこなわれたのでは・・・

安威川河川敷を走りながら、「そう 十日ぐらい前から 真っ赤な花 緑の草の中の まっかっか」オレは、まんじゅしゃげく曼殊沙華・ヒガンバナ スクリット語 純白で見る者の悪行を祓う>と呼んでいるが、この漢字は知らなかった。まんじゅしゃげの赤色、ずっと向こうまで続く緑の草の中に、ポツリポツリの赤の群れ、この赤は絵の具のライトレッド、少しパーミリオン（朱色）が入ったやつもある、とにかく赤い、思いきり赤い。

先日大発見、今更大げさな、今更バカげたことを、失笑されるだろうが、絵の具は混ぜてはいけないね。「さ最後の色 最後の筆」と考えた絵。「いつもの色で行こうか ちょい 混ぜてみるか」違った色をぬってみようと下らない色気を出してしまった、ブルーにグリーンを混ぜてみた、しかも不透明なグリーン、「ちょっと 色が渋い 渋すぎないかな ええい いけえ」筆にたっぷり絵の具を含ませて、絵の具を乗せた、また乗せた。「これは アカン」ウエス用の大きな布を大きな絵の下に敷き階下のドアの外に出た、ホースで水をかけた、なかなか取れない、取って返し、たわしを持ってきた、水をかけながら絵をたわしでこすった、「とれた 完全に元に戻った」その翌日に、素直にいつものブルーで絵を完成させた、「絵の具は混ぜてはいけないね」という大発見、今更ながらの大発見、色が重くなる、汚くなる、「まっこと 今更」の話でした。

絵の撮影の話、フィルムカメラの話。大きな絵が 20 枚溜まったので、冷蔵庫からフィルムを出し、絵を並べた。絵の撮影といってもなかなか段取りが大変なのです、まず夜を待って、壁をきれいにし、大型カメラを添えつける。2 か所にイーゼルを立て、ライトをつける。左右ふたつのライトで壁に均等に光が行くように微調整が難しい。これでいいだろうと思っても画面のどこかがちょっと薄暗い、というのではだめなんですぞ。6x7 フィルムホルダーに装填、これがまたややこしい、手造りトリセツ（取扱説明書）をじっくり吟味して装填完了。4x5 カメラも手造りトリセツをじっくり吟味、絞りは明るく、シャッター速度は 1/2 秒、ガラスに移ったボケ画像のピントをゆっくりあわせていく。20 枚を 3 時間かけ、慎重に撮影した、「今日は チョンボはなかった 2 本とも上手くいった」一週間かかった現像が上がってきたのを見た。フィルム 2 本とも 10 枚ずつが写るはずなのに、7 枚ずつしか写っていない。10 枚撮れるフィルム一枚目二枚目が真っ黒、今まではコマ送りの幅が 3 ミリぐらいだったのが、20 ミリになっている、そのせいでくれこんだ最後の写真にポッチキスの穴、「あちゃ〜」である。2 本とも同じ現象、これを見てがっかりした。カメラは問題なさそうだが、フィルムホルダーが潰れたようだ。鉄製の箱、おいそれとは潰れないが、6 月の地震、絵がたくさん倒れ直撃したのかもしれない、箱自体は大丈夫だったが、巻取りレバーでもやられたのか。後日中西プロに見せたが、「こら〜 おてあげ」といわれた。たまたま、春ぐらいから、デジタル写真の RAW 現像を中西プロに教えてもらっていた、この機能を使うと、気に入らない画像、色がちょっと違う、メリハリが、輝きが、こんな諸々の繊細な雰囲気徐徐にお気に入りの画像に仕上がっていく、これからは絵の撮影はデジタルカメラでやるぞと思い始めた。6x7 フィルムの写真はなかなか素晴らしい、ルーペを通してみるとなにからななまですっきりと写っている。ところがこれをデジタルに取り込むときに、古いフィルムスキャナーが怪しくなってきた、Photoshop での RAW 現像が利かない、それと地震で 500W のライトがいくつか割れた、これからは、絵の撮影はデジタルカメラかな、と本気で思っている。

体調の話。娘からもらったオムロンの体重計が、いい加減だめになってきたので、新しく買い替えた。同じメーカーのものが来ている、3000 円ぐらいだったかな。古いやつの時には年齢が 45~48 歳ぐらいをいききしていたが、新品に換えた 6 月に一気に 50~52 歳になってしまった。どうも機械というやつはいい加減なものだと思っていたが、8 月の猛暑がやってきたら、体重も年齢も 2 ぐらいずつ上がって、72 キロ・53 歳、という数字がでだしていまだに下らない。猛暑のせいで水や茶を何杯も飲む、身体が弱っているのか 3 歳も老け込む、これはいやだねと思っていた。「71 歳のおまえが 53 歳 いい数字が出ているのに そらあ わがままだ」と怒られそうだが、「1,2 か月で 3 歳も老け込むのは よくない」と日々体重計を睨んでいる。秋風が吹き始め、河原での走り方も、多少ピッチが上がり、期待をしているが、まだ 52 歳が 2 回しか出ていない、と下らない話です。なら

遷延性意識障害（せんえん）この言葉、なんのことだ、植物状態の人のことをいうらしい。なんでこんな言い回しという説明に、外国語直訳での、“植物”という言葉が非人間的とか。なら“遷延性”という理解不可能な言葉が人間的か、首をかしげる。植物状態と脳死との違いは、「脳波活動ができない状態にあるが ころうじて生命維持に必要な脳幹部が生きている 意識が回復した例もある」 自発呼吸ができ、脳波もある、眼球も動く、排せつもある。友人のIさんを三回見舞いに行ったが毎回同じ状況、同じ姿勢、ベッドに横たわっている。日本で年間1万人たらずの方が病気や外傷で植物状態になるらしい、三か月で病院を転移しなければならないとか、自宅で看取らなければならないとか、問題は多い。元気な親にとって、かわいい子供がそんな状態になれば、意識回復の一縷の望みをかけ、何日も何年も看取っている方がいる。

友人のIさん、70歳ぐらい、植物状態になって2か月足らず、看取る家族もない。ヒッピー暮らしのアメリカから帰国して、ボロアパートの家主だが、ずっとアルバイト人生。建築職人の手伝いをされ、多い友達連から好かれ、飄々と陽気な日々を過ごしておられた。オレと4,5回、山を同道した、アトリエでも寝た、オレもボロアパートの1階自宅に泊めてもらったことがある。「高いところならまかして 平気だ」オレの高所恐怖症を笑って豪語しておられた。細いハシゴをツツカケ履きでひょいと屋根まで登れる人だったと想像できる。今回、ヘルメットも被らず気楽にハシゴを登って鼻歌交じりにペンキを塗っていた姿が想像できる。まさか高いところから落ちるとは思ってもいなかったはず、意識不明になって植物状態になるとは思ってもいなかったはず。

馬場あき子著<鬼の研究>先生の本の中で、ケタイな文を見つけた。「西行、高野において、人を造る」<撰集抄> この話は、真言密教の秘儀を付会した作り話としての要素が濃い、平安時代末期、高野山でこのようなことが語られていたとは、驚きである。

◎西行：かの有名な人、武士であり、歌人であり、僧侶であり。平安時代末期の人、諸国を漂泊して巡った。下記、桜の花が好きだという歌より、東北まで来て、年が暮れるのは寂しいという感情のほうが好きだなあ。

◎願はくは 花の下にて 春死なん そのきさらきの 望月のころ

◎つねよりも 心ほそくぞ 思ほゆる 旅の空にて 年の暮れぬる

◎西行が高野に住んで修業していたころ、同じ聖の修業者と月を眺めて物語することなどがあつた。その聖がやがて京に上ってしまった。西行はその友を懐かしむあまり、むかし聞いた恐ろしくも懐かしい話を思い出した。それは、人もない広野の間に鬼があらわれ、白骨化した死骸の骨を取り集め、再び人間に復活ことであり、自分もその方法を何とか聞き知っていたのである。日頃は思い出もしなかった秘儀の手順などが友を失った寂しさから、ありありと思い出された。知らず知らずに広野に歩み出た西行は、折からの月明かりに、遺棄され白く晒された人の骨が白く散らばっているのを見出した。西行は聞き知るとおりに、その骨を集め、つる草で結び、秘呪を行じて人間を復元することに成功した。しかしなぜか肌色も悪く、人の姿はしているが人の心もなく、第一に声の悪さと言ったら、下手な管弦のひびきそのまま、何を言っているのかさっぱりわからない。いったん人間として復活したからには殺すわけにもいかず、怖れ困じて高野の奥に置き捨てた。西行は人間を造りそこなった不審を晴らそうと、すぐに秘儀を教わった京の徳大寺に参上した。伏見中納言師仲は西行の軽卒を哀れむように方法を問うた。西行が答えて曰く、「間違いの無いようすべての骨を並べ 入念に骨をつなぎ合わせました 何度も水で清め 畳を敷き 十四日間ののち反魂の術を行いました」「お前はまだ 反魂の術の終業が足りないのだ」 西行は我に返り、友を失った侘しさから、新たな人間を（友を）造ろうとした愚かさに気付いた。「花月の情」をわきまえた友の再現を願うより、自身が、「花月の情」の鬼となることを求めはじめたのだろう。